劉師復死後の『民声』について

嵯峨隆

第一章　問題の所在
第二章　劉師復の遺産
第三章　第三期『民声』
第四章　結語

第一章　問題の所在

本稿は、劉師復[1]死後における『民声』の発刊状況と論説の内容を検討し、一九一〇年代から二〇年代にかけての中国のアナキズム運動とその思想的特徴について考察するものである。

中国に西洋アナキズムが紹介されたのは一九世紀末のことである。やがて、一九〇七年に至って東京とパリで、それぞれ『天義』と『新世紀』というアナキズムの宣伝誌が創刊されたが、国内での実際の運動にまで高められるには、一九一三年の劉師復による『晦鳴録』（第三号から『民声』と改題。以下、本稿では『民声』の名称を用いる）の創刊を待たなければならなかった。ある論者によれば、該誌はアナキズム宣伝誌として「中国本土で刊行された最初のものであ

るということと、その理論水準の高さと影響力の大きさからして、中国近代思想史上きわめて重要な意義をもつ」[2]と評されている。こと『民声』の評価に当たっては、これ以上のことを付け加える必要はないであろう。

だが、『民声』刊行の歴史は決して平坦なものではなかった。それは幾度かの断絶を経ながら刊行されたのである。いま、先行研究に従って『民声』刊行の歴史を時期区分するならば、それは大きく三つの時期に分けられる。即ち、第一期…創刊（一九一三年八月二〇日）～二二号（一九一四年八月九日）、第二期…二三号（一九一六年五月五日）～二九号（同年一一月二八日）、第三期…三〇号（一九二一年三月一五日）～三四号（同年八月一五日）である。[3]以上の『民声』の刊行の経過は、中国アナキズムが思想的啓蒙の段階から運動の高揚時期に入り、そしてマルクス主義という思想的敵手に立ち向かっていった過程でもある。その意味で、『民声』刊行史はそのまま成長期にあった中国アナキズム運動の過程を示しているといえよう。この中で、これまで最も関心を引いたテーマは、第一期における劉師復の思想的特徴についてであった。[4]『民声』の基本的論調が師復の思想によって方向付けられたことからすれば、こうした傾向には当然すぎる理由があったと言えるであろう。

しかし、中国アナキズム全体の歴史からすれば、劉師復死後の時期も『民声』は依然として考察の対象たりうる意義を持っている。まず第二期においては、師復の死後、彼の思想が継承されたかという問題がある。そして第二期から第三期までの四年数ヵ月の空白の間、師復の後継者たちによって運動は如何に維持されたかも検討されなければならない。最後の第三期は、中国アナキズムが最大の挑戦を受ける試練の時期に該当する。そうした状況において、アナキズムは民国成立当初の姿を維持するだけで、果たして影響力を保ち続けることができたであろうか。それは恐らく不可能であった。思想が周囲の状況における様々な課題に対する体系化された回答である限り、状況の変容は思想の内容の変化を促すものだからである。そこで本稿は、第二期と第三期の『民声』を分析することによって、師復の思想的遺産が如何なる形で受け継がれ、そして新たな環境に対応して行ったのかを考察することにする。

第二章　劉師復の遺産

後に書かれた文章で、「創刊から第二二号まで、文章の執筆から様々な計画に至るまでの出版社の仕事は、全て師復が担当した」[5]と記されているように、第一期『民声』は劉師復の個人誌的色彩が強かった。現に、第一期の掲載記事と執筆者を見ると、論説記事は全て師復の手になるもので、梁冰絃、許論博、黄尊生らが翻訳を担当していたのである。[6]従って、第一期『民声』の特徴は、とりもなおさず師復個人の言動の要約を以って代えることができる。以下、その特徴を簡単に述べておくことにしよう。

劉師復のアナキズムの第一の特徴は、第一世代アナキストのパリグループと同様に、クロポトキンの無政府共産主義を思想的基盤に据えたことである。そして彼は、将来の理想社会に至るための革命の手段としては、労働者のゼネストが有効であると考えていた。西洋のアナキズム運動においては、それぞれ別個のものとしてあった無政府共産主義理論とサンディカリズムが、彼にあっては理想社会と、そこに至るための手段という形で結合していたのである。しかし、中国の現実の労働者は依然として知的水準が低い状態にあった。そのため、彼の活動も啓蒙の水準を起えるものとはなり得なかったのである。

劉師復のアナキズムの第二の特徴は、思想的厳格さと道徳の強調にあった。彼は、思想解釈に当たっては原則に忠実であろうと努め、江亢虎の如き恣意的解釈を行なった人物に対しては厳しい批判を加えた。また彼は、人は信奉する思想に忠実であるべきだと考えており、アナキズムを奉じながら政治を容認した人々に対しては厳しい態度を取り、第二革命にも反対の姿勢を貫いたのである。師復による道徳の強調は、彼が組織した修養団体である心社での活動に現われていた。心社は新しい社会のための新しい道徳を普及させようとする団体であり、その戒律には肉食や飲酒を禁止する生活面での項目を初め、政治・宗教・家族を否定するものまで盛り込まれていたのである。

劉師復が肺病で世を去ったのは、一九一五年三月二七日のことである。この時、『民声』は既に停刊してから七ヵ月以上経過していた。四月一日、上海無政府共産主義同志社は追悼会を開催した。当日、社の同人は「『民声』が東亜の唯一の宣伝機関であって、我が党の主義の前途に関わること甚大である」ことに鑑みて、これを維持することの必要性とその方策について話し合った。(7) そして、それから一ヵ月ほどして『民声』第二三号が出版された。ここに、『民声』は第二期へと移行することとなったのである。

まず、第二期『民声』の担い手から見て行くことにしよう。『民声』第二三号に掲載された「本報哀告」と題する記事は、「同人は等しく、君［師復］が死んで東亜の無政府主義の一筋の曙光が共に滅びてしまうことに忍びず、克勤君を推して編集の後任とし、第二三期から刊行を再開した」と記している。(8) 同号から『民声』の「通信処」の宛て先は「Sifo」から「K. Gun」に変更になっているが、これは恐らく右の引用文に出て来る「克勤」という人物を指すのであろう。この克勤という名前は、無政府共産主義同志社のエスペラント名（Anarhiista-Komunista Grupo）の頭文字A. K. G.への当て字であるところの、「区克勤」に由来するものと見られる。(9) この人物が誰なのかは判然としないのであるが、狭間直樹氏は、鄭佩剛が一九二一年にKGの署名で復刊された『民声』を、自らの所為としていることから、(10) K. Gun＝KGとして克勤を鄭に比定しており、(11) その可能性はかなり高いと言わなければならない。しかし、そうであったとしても、鄭佩剛が全てを統括していた訳ではなかった。現に、師復の弟である劉石心は次のように述べているのである。

師復の死後《民声》の編集は困難となった。林君復がどうにか数ヵ月間代理を務めたのだが、彼も自らの力不足を感じたのである。ちょうどその時、梁冰絃が師復の葬儀に参列するため上海にきたので、佩剛は彼に編集を依頼したのであった。間もなく冰絃がシンガポールに渡ったので、《民声》の原稿は彼が国外で編集した後、上海に送り、それを佩剛が印刷、出版した。(12)

林君復は鄭彼岸（佩剛の実兄）らと共に、清末時期から師復と行動を共にした人物であったが、彼が如何なる点で「力不足」であったのかは不明である。林の後を継いだ梁冰絃は、一九一四年にラングーンで『正声』を創刊するなど、南洋地域でアナキズムの宣伝に務めていた。[13] また、劉石心は師復の葬儀の後、梁冰絃に従ってシンガポールに渡り、当地で教員を務めたと述べているが、[14] 恐らく彼も『民声』の編集に関わっていたものと推測される。この後の『民声』の寄稿者には、梁を初めとして黄尊生、盛国成、楽無らがいたということであるから、[15] 第一期『民声』の翻訳担当者たちがそのまま執筆陣に残ったことが分かる。

劉師復死後の『民声』は、おおよそ以上のような態勢で出発した。以下、その記事の内容を見て行くことにしよう。

劉師復の後継者たちは、『民声』の刊行を以って中国におけるアナキズム運動の命脈を保とうと考えていた。例えば、該誌第二五号の記事において、梁冰絃は大略次のように述べている。プルードンやバクーニンの死後、彼らの主義がヨーロッパ大陸に広がったのは後人の努力によるものであった。ましてや、現在は武器を砥ぎ澄まして政府に向かって宣戦を布告すべき時である。一刻も早く戦闘の準備をして敵に攻撃を加えることこそ、他ならぬ我々の務めなのである。そして、そうすることが師復の遺志を継ぐことであり、人民の幸福に繋がることなのである。[16] ここには、後継者たちの運動構築に向けての並々ならぬ決意が示されていると言えよう。だが、彼らに師復と同様の言論活動を期待することは不可能に近かった。そのため、第二期『民声』では論説記事が極端に減少し、翻訳と内外各地の動向紹介の記事が増えることとなったのである。

しかし勿論、そうした中にも後継者たちの姿勢というものを見て取ることができる。例えば、第二七号に掲載されたイギリスの炭鉱労働者のストライキを紹介した記事においては、この闘争の勝利の要因が労働者の直接行動によるものだとして次のように述べている。「国家は危機に瀕した時に労働者に助力を求めるのであるが、労働者が政府の命令を完全に無視し、各国でも同様にすれば国家は存在の余地がなくなり、無政府共産は即座に実現できる。ここか

らして、政府の運命は全て労働者の自覚にかかっている」[17]。ここには、無政府共産主義とサンディカリズムとの結合という、従来の師復の主張が受け継がれていることが確認できる。

第二期『民声』が劉師復の遺志を受け継ごうとする姿勢は、後継者たちの江亢虎らに対する態度にも明確に現われている。第二六号の記事によれば、サンフランシスコで発行されている『新中国少年報』という新聞に「社会主義同志会広告」と題する文章が掲載され、そこには師復の遺族および民声社が困窮しているため、江亢虎が義援金を取りまとめて遺族に転送する、という主旨のことが書かれていた。これに対して民声社は、師復の遺族は資産家ではないが、江亢虎の如き人物に尻尾を振って哀れみを請う必要などない、とする立場を表明した。勿論こうした姿勢が、他者に経済的援助を仰ぐことを潔しとしないという心情のみに因るものではなかったことは明らかである。むしろその基盤には、かつて師復から徹底的な批判を受けたにも拘わらず、江が依然として誤った言論を展開していることに対する不快感があったのである[18]。ここに、彼らは師復の思想的厳格主義をも受け継ごうとする立場に立っていたことが理解されよう。

さて、第二期『民声』において、劉師復の後継者たちの手による本格的な論説記事が掲載されるのは第二八号のことである。この号の「進行間之無政府党」と題する記事では、第一次世界大戦期における国際アナキズム運動の情勢について言及している。著者はここで、アナキストたちの運動が一見して戦争の防止に無力であり、且つ現在ではその矛先を収めてしまったかのように見えるが、実はそうではないという。むしろ、現今の政治・経済制度の劣悪なる実態が明らかになればなるほど、アナキストの主張は正当なるものとして評価されるようになるのであって、ヨーロッパ大戦の勃発によって民衆が国家主義や軍国主義から教訓を受け、飢饉や家族の死という苦しみを味わっている状況こそ、アナキストが真理を宣伝する絶好の機会であると指摘する。次いで、著者は各国の状況を概観し、革命運動の展望が明るいことを指摘するのである[19]。

それでは、中国の情勢および革命の在り方については如何なる見方をしていたであろうか。同じ二八号に掲載された「時事罪言」と題する記事は、そのことを知る上での参考となるであろう。

当時は、袁世凱の帝制復活の企てが失敗に帰し、国会が復活するなど全般に秩序の回復期にあった。しかし、著者は民衆に向かって、秩序の安定を訴える政権担当者や政治家の言葉を絶対に信用してはならないと言う。何故なら、彼らの言動は民意を代表することはできないからである。むしろ、民意なるものは、労働者・苦力・被抑圧民衆の生活の中にこそ求めなければならない。それでは、彼らにとって緊要なものは何かと言えば、それは「人民の急なる所は生計のみ、衣食のみ」[20]とされるように日常生活の確保に他ならない。ところが、上に立つ政治家たちが唱える文句といえば、「民国に対して謀反を働いた」とか、「国会を解散させた」とか、或は「総統の専制が憲法を混乱させている」などということであって、これらはいずれも一般民衆に関わることではなかった。何故なら、「謀反」「混乱」「専制」などによって被害を受けたのは、権力の行使に関わることができる人でしかなかったからである。言うまでもなく、それらはいずれもアナキズム革命によって除去されなければならないものである。しかも、政治家たちは自らが権力闘争の場に参加するために、民衆の苦悩を顧みずに税を取り立てて軍隊を拡充するのであって、彼らの存在は人民の生計に寄与するものではない。従って、真に民衆の利益を求めるなら、彼らに依拠して運動を進めるのではなく、「皇帝と闘い、官僚・軍人と闘い、偉人・政客と闘う全体的な平民革命以外に道はない」[21]とされたのである。

権力の獲得や分配を目指した闘争ではなく、平民革命こそが人民の生活や利益に則したものであるとする立場は、生前の劉師復によって繰り返し主張されたところである。例えば、かつて師復は袁世凱の独裁体制確立の過程で「政治之戦闘」という論説を書き、当時一般には中国の危機状況を救うには政治的手段以外にはないと考えられていた中で、権力の存在を前提とした反政府運動は結局のところ強権の継承者を生み出すだけで、民衆の幸福に繋がるものではないと主張していた[22]。今や師復の時代とは異なって、独裁体制は瓦解し、再び共和体制が回復されたかに見える状

況であった。然るに、師復の教えを遵守する彼の後継者にとっては、権力に善し悪しの区別などはなく、アナキズム革命の実現のためには、権力の存在を前提とするあらゆる制度、そしてそれを支えるあらゆる勢力と闘っていかなければならないと考えられたのである。

さて、生前に劉師復を悩ませたことが一つあった。それは、ヨーロッパのアナキストの中に、第一次世界大戦における反ドイツの戦いを正当化する意見が現われていたことである。クロポトキンなどはその好例であった。『民声』第二二号に掲載された「克魯泡特金対于欧洲戦争之意見」には、彼の見解が大略次のように要約されていた。即ち、ドイツ帝国主義は専制政治の擁護者であって、欧州進化の障害物である。もしドイツが勝利を収めればヨーロッパは五〇年退化するであろう。戦争を免れようとするなら、根本から資本と国家を廃絶しなければならない。しかし現在の見地からすれば、ドイツの侵略政策の阻止に尽力することが必要である。何故なら、ドイツの侵略は進化の障害となっており、侵略者と戦うことは進化の障害物と戦うことであるからである。ドイツの侵略を阻止しようというクロポトキンの主張は、各国人民が力を合わせて進化の障害物に抵抗するということであって、政府を助けて戦争を鼓吹するが如き謬論とは大きく異なるのである。[23] しかし、如何なる論理を用いたとしても、クロポトキンが祖国の参戦を許容するが如き言辞を吐いたことは、彼を最大の理論家として尊敬する師復にとっては恐らく大きな衝撃であったと推測される。師復自身はこの問題について論評を加えていないが、同じ号に徹底して愛国主義反対の立場を貫いたオランダのアナキストの立場が紹介されていたことは、[24] 師復の複雑な心境を示していたと言えるであろう。

劉師復死後の『民声』においては、第一次世界大戦の位置付けについての明確な姿勢が示されるようになる。例えば、第二三号に掲載されたマラテスタの原著に係る「無政府党忘其根本主義矣」と題する論説は、ヨーロッパ大戦を自由のための戦争だとは認めないとする立場に立つもので、クロポトキンとは明らかに意見を異にするものであった。また、第二九号掲載の「政魔之末日」という記事は、当時の国際情勢を中国古代の状況に準えたうえで、これを現状

維持勢力（儒家・墨家＝協商国）に対する強権派（兵家・法家＝ドイツ）の挑戦と捉え、この大戦でドイツが勝利を収めたなら強権派に世界の覇権を握らせることになると説く。しかし、著者はクロポトキンとは違って、現状維持勢力の戦列に加わることを容認することはしない。むしろ、現状を打破しつつ強権派とも闘う自由派（道家・農家＝アナキズム）の存在があることを指摘し、「その勢力が日増しに成長し、人々が自治を行ない支配者を生じさせることのない共産の道を以って、現在の日々殺人を行ない領土を争う状況に代える」[25]ことが求められたのである。ここに、師復の後継者たちによってアナキズムの原則は貫かれたのである。

以上において、第二期『民声』の論調について概観してきた。我々はここで、劉師復の遺産が彼の後継者によってほぼ受け継がれたことを確認できた。唯一確認できなかったものは道徳の強調ということである。しかし、道徳が実践に重きを置くものであること、そして師復自身が『民声』と心社の活動を別個のものとして捉えていたことからすれば、或は該誌に現われない部分で道徳主義も受け継がれた可能性はある。

さて、第二期『民声』は第二六号まではどうにか月二冊の割合で定期的に出版することができたが、これ以後は資金不足などが原因で不定期化を余儀なくされた[26]。そして、第二期『民声』は第二九号を以って停刊する。鄭佩剛の回想によれば、停刊は「主編が他所に移ったこと」が原因で、「印刷機、活字およびその他の工具は白苹洲の紹介で閘北の江南養鶏場に預けられた」[27]ということである。この後、一九一七年四月に同志間の交流の場として『民声社紀事録』が創刊され[28]、第三号まで出版して停刊した後、『民声』はおよそ四年間の眠りにつくことになる。そこで次章においては、第三期『民声』の登場の経緯とその特徴を見て行くことにしよう。

第三章　第三期『民声』

(一)『民声』復刊までの過程

第二期『民声』の停刊後、出版に携わった人々はそれぞれの持ち場で活動を継続させることになる。ここでは、一九二一年の第三期『民声』の登場に至るまでの主要な人物の動向を簡単に整理しておくことにする。

まず、第二期『民声』の実質的な責任者であった鄭佩剛は、該誌停刊後、一時汽船の船員となって生計を立てるなどした後、一九一七年春に北京に赴いて袁振英・黄凌霜らとの協議のうえ実社を結成する運びとなった。実社は機関誌として『実社自由録』を創刊することとなり、袁と黄が北京で編集に当たり、鄭は上海で印刷と発行に当たることとなった。そのため、彼は上海に戻って準備に当たると共に、民声社の名義で前述した『民声社紀事録』を発行したのである(29)。

前章で述べたように、梁冰絃はシンガポールで『民声』の編集に当たっており、彼と同行した劉石心は当地で教員となっていた。彼らは一九一八年二月に、帰国して上海で大同書局を創設し、翌月『労動』(月刊)を創刊した。これは「労働の尊重」「労働主義の提唱」などを主旨とするものであって、中国における労工主義の先駆けとも言うべき存在であった(30)。該誌出版に当たっては、梁冰絃が主編、劉石心が助手、そして鄭佩剛が出版を担当したということである(31)。しかし、該誌は同年七月に第五号を出版したところで停刊となったため、梁は広州に移り、劉はスマトラに渡ることとなったのである(鄭はそのまま上海に留まったものとみられる)。

この間、生前の劉師復の思想宣伝の効果もあってか、国内各地でアナキズム団体が結成されていた。その中で主立ったものを見るならば、一九一六年一一月には、かつて無政府主義討論会を主宰していた楊志道・許真風らが南京で群社を組織し、『人群』一期と『周年報告』一冊を出版した。また、一八年には山西省喜聞県の尉国水と剣平が平社

を組織し、『太平』を一期出版した。しかし、軍閥政府の圧制の下で、彼らの宣伝・出版活動は困難を極めていた。そこで一九年一月、上記二団体と実社・民声社が合併して上海で進化社を結成し、『進化』（月刊）を出版することとなったのである。該誌はクロポトキンの相互扶助論の紹介に努め、「いわゆる『各尽所能、各取所需』の自由平等の〝互助〟生活を提唱し、〝互助〟を進化の要素と見な」すものであった[32]。そして、それと同時に、該誌は最後となった第三号を「師復紀念号」と銘打っていることからも分かるように、劉師復の思想の称揚にも努めていたのである。

さて、南洋に渡っていた劉石心は『スマトラ報』（中国語新聞）を出版し、アナキズムの宣伝を行なっていたが、これが原因で現地の官憲によって弾圧を被るところとなり、一九一九年に国外退去処分を受けることとなった[33]。そして同年秋、当時広州で『民風』を出版するなどしていた梁冰絃を頼って広州に戻り、彼らは再び行動を共にすることとなった。そしてここに、当時「援閩粤軍」を率いて福建省漳州に進駐し、「閩南護法区」と称していた陳炯明が、内外の新たな情勢に対応すべく自らの支配地域に社会主義者を招聘しようと考え、梁冰絃に白羽の矢が立てられることとなった。この間の事情を、劉石心は次のように記している。

> ……しかし、冰絃は陳炯明とは親しくなかったので、私を引っ張って共に漳州に行くことにした。というのは、陳は以前師復と暗殺団を結成したことがあり、私がその師復の弟であること、そして陳とは師弟関係にある（辛亥革命後、私は陸軍軍官学校に入ったことがあり、陳は校長だった）ことが、活動を展開するのに都合がよいからであった[34]。

梁冰絃と劉石心が漳州に赴き、『閩星』（週刊）を出版したのは一九一九年末のことであった。梁はここで教育局長となり、劉は同秘書に任じられた。そして、ここにかつて進化社の成員であった許真風・尉国水が加わり、漳州は恰も華南におけるアナキズム運動の中心地の如き様相を呈するに至ったのである。

一九二〇年一〇月、陳炯明は「粤人治粤」のスローガンを掲げて広州に入り、広西軍閥の莫栄新を追放した。その

ため、梁冰絃らも相前後して広州に戻った。ここにおいて、中国のアナキズム運動は新たな段階を迎えることになる。即ちこの後、アナキズムの陣営はマルクス主義者との間の束の間の協力関係を経て、対立関係へと入って行くことになるのである。

中国人アナキストとマルクス主義者との接触は、一九二〇年のロシア人との接触から始まる。まず同年春、当時上海から広州に移っていた鄭佩剛は、一人のロシア人からエスペラントで書かれた手紙を受け取った。差出人はBrowayとあったというが、これは当時北京大学ロシア語教授であったC・H・ポレヴォイのことである。その手紙は天津から出されていたので、鄭は広東出身で北京大学の学生であった黄凌霜に彼と接触させた。その後、暫くして黄から手紙が届いたが、その内容はポレヴォイと何度か話し合い、陳独秀・李大釗ら何名かを誘って会議を開き、社会主義者同盟を結成し、指導者には陳を推挙したというものであった。そして、黄は陳が上海に赴き活動するので、鄭にも上海に戻ることを要請していた。(35)

一九二〇年夏、ポレヴォイの連絡を受けたコミンテルンは、ストロミスキー（ロシア人）と楊明斎を上海に派遣した。彼らは、早速当地のアナキストを含む社会主義者と接触し、当時既に北京から上海に移っていた陳独秀の自宅で会議を開いた。その時の状況を、鄭佩剛は次のように記している。

> ある晩、私たちは漁陽里一号の陳独秀の家で社会主義者同盟の会議を開いた。そこでは、コミンテルンの精神が伝えられ、社会革命活動を積極的に展開する問題について討論が交わされた。出席者はストロミスキー、楊明斎、陳独秀、李漢俊、尉国水、袁振英、兪秀松、金諜（朝鮮人。金九か?）、それに一人のインド人と私だった。［中略］ストロミスキー氏は陳独秀を通じて私に二千元を与え、印刷所の開設費用とさせた。(36)

ここでいう社会主義者同盟とは、今日で言われる上海共産主義小組に他ならない。今日では、一九二〇年の半ばには

異分子を排除した形での中共建党が日程に上っていたとする主張がある一方、鄭佩剛の回想がこれと全く逆のことを述べていることは興味深い。

続いて、コミンテルンは広東のアナキストにも接触を試みている。コミンテルンが彼らに着目したことには相応の理由があった。即ち、当時広東において労働者を組織化し、広西軍閥への抵抗に積極的であったのはアナキストたちであったからである。そこで、一九二〇年七・八月の間、ヴォイチンスキーの側近の工作員であるベスリンとミノールという二人の人物が、黄凌霜の紹介で広東にやって来た。彼らの表向きの名目は、俄華通訊社の設立であった。黄は彼らを梁一余・区声白・梁冰絃らアナキストに紹介し、自分は間もなく北京に戻って行った。[37] 彼らは、広州永漢北路にある光光眼鏡店二階を活動の中心としたが、ここには梁・区を初め、劉石心・黄尊生といったかつて第二期『民声』に関わった人物が頻繁に出入りしていた。そして、彼らはロシア人からの資金援助の下に、二〇年一〇月に『労動者』(週刊)を創刊することになるのである。

『労動者』の出版には、マルクス主義者は全く関わっていなかったと言われる。[38] そのため、その内容はサンディカリズムなどの宣伝が主であった。だが、ある論者によれば、一九二〇年一二月にアナキストとマルクス主義者は、合作による党の建設を協議したことがあったとされる。[39] 更に、『労動者』第二号(一九二〇年一〇月一〇日)には、広州で「広東共産党」名義のビラが撒かれたという記事が掲載されており、このことは恰も両者の合作による党結成が実現したかのような印象を与える。[40] しかし、そのビラの内容は典型的な無政府共産主義であり、マルクス主義者との合作の形跡は感じられない。[41] 実際のところ、アナキストとマルクス主義者の間で屢々会合は持たれていたものの、そこでは具体的な問題に踏み込むことはなく、結論は出なかったということであり、[42] アナキストが単発的に「共産党」の名義を用いたことはあっても、それは合作によるものではなかったというのが事実と見られる。

広東におけるアナキストとマルクス主義者の間の緩やかな協力関係を、一挙に解体に向かわせた人物は陳独秀であ

る。彼は一九二〇年一二月末に広州に到着しており、当地の社会主義者たちの会合に出席することとなった。ここで、陳の思想を詳しく論ずる余裕はないが、既にアナキズム批判を開始していた彼は、ボルシェビズムの組織原則に忠実な形での党建設を志向したことは当然考えられることである。当時、広州で活動していた黎昌仁は次のように記している。

> 一九二一年（何月のことかは思い出せない）、陳独秀、譚平山らが、広州永漢北、光光［眼鏡店］の二階で会議を開き、これには無政府主義者の黄尊生、区声白、梁冰絃、黄凌霜、譚祖蔭、袁振英も参加した。［中略］陳独秀は皆の合作を主張、統一戦線結成と分裂回避を希望したが、梁冰絃らは陳の意見に同意せず、かくして共産党と無政府主義者の合作は最終的に決裂したのである。(43)

ここで陳がいう合作と統一戦線の結成は、対等の立場に立ってのものではなかった。むしろそれは、「合作を望む者は共産党に加入せよ、そうでなければ合作から降りよ」(44)というものであり、アナキストに宗旨変えを迫るものであった。当然、アナキストはこれに応じることはできなかったのである。

一九二一年一月、ロシア人による資金援助の打ち切りによって、『労働者』は停刊に追い込まれた。そして同年春、陳独秀の直接の指導の下、中共広東支部が成立する。党結成に当たって、陳はアナキストの党参加を禁じたという。折りしも、一九年からの黄凌霜によるマルクス主義批判、そして二〇年九月の陳独秀の反論に始まるアナキストとマルクス主義者の論争（アナ・ボル論争）は、二一年に入って広東の地で本格化しつつあった。このように、マルクス主義者という強力な思想的敵手の登場に直面する中で、アナキストたちは陳炯明の庇護の下で『民声』の再生を図ることとなった。かくして第三期『民声』の出発状況は、第二期の時とは大きく異なったものとなっていたのである。

(二) 第三期『民声』のマルクス主義批判

一九二一年三月一五日、『民声』第三〇号が月刊誌として刊行された。同号の巻頭には「民声小史」と題する文章が掲載されたが、これは『民声』の来歴を語ると共に、再出発の決意を表明するものでもあった。かつて、『民声』創刊号に掲載された「編輯緒言」では、『民声』の存在は宇宙の中の塵に例えられていたが、「民声小史」の述べるところによれば、「この一つの塵は二年余りゆらゆらと動き、そして跡形がなくなってしまった。更に四年を経て今日に至り、この塵は再び太陽光線の下で輝き始めた」[45]のである。

『民声』再復活の中心となったのは、言うまでもなく梁冰絃・劉石心といった広州に結集していた劉師復の弟子たちである。同号の「広告」には、「投稿や予約など一切の郵便物は、広州郵務局私書箱第七十四号何柏堅あてまで送られたい」と記されている[46]。しかし、宮本正男氏も指摘しているように、この「何柏堅」は恐らく実在の人物ではない[47]。同号の英文版で、この人物が「HOPOTKIN」と表記されていることからすれば、これはクロポトキンの名をもじった架空の人物と考えられよう。

さて、前節で述べたように、第三期『民声』の刊行の背景にはアナキストとマルクス主義者の対立構造の形成があった。こうした背景は、この時期の『民声』の記事内容を大きく規定することとなり、復刊後の六期の分量のうちの約三分の二はマルクス主義批判に当てられたのである[48]。

一般に、中国におけるアナ・ボル論争の論争点としては、(1)生産と分配の原則についての問題、(2)プロレタリア独裁を容認するか否かの問題、(3)階級闘争を歴史発展の要因とするか否かの問題、(4)絶対自由を承認するか否かの問題がある。これらの論争点のうちで、第一の点は『民声』においては殆ど取り上げられることはなかった。そのため、ここでは(2)以下の三つの点について見て行くことにする。

まず、プロレタリア独裁をめぐる問題から見て行くことにしよう。『民声』第三〇号には、「無政府共産派与集産派

之岐点」と題する記事が掲載されている。この記事は、世人が「我々と彼らが共に資本制度を滅亡させることを目的とするため、同一のものであると誤認してしまっている」[49]状況に鑑みて、マルクス主義とアナキズムの相違を示し、自らの優越性を明らかにすることに主眼が置かれたものである。著者によれば、確かに革命の手段などの点においてはマルクス主義とアナキズムの間には共通する部分もある。しかし、政権の維持とプロレタリア独裁の容認の一点は、彼らの間の共通点を押しのけるほどの決定的な相違であるという。取り分け、プロレタリア独裁は「資本階級と、資本家を保護する貴族階級を打倒した後に、自分自身が政権の舞台に上り、政権を行使するのであるが、この時の至上の独裁者は実際には既に平民ではなくなっている」[50]ため、人民の意思を代弁するものとは言えないとされた。

第三二号に掲載された「評平民的独裁政治」という記事になると、プロレタリア独裁に対する批判点は更に明瞭となる。著者はここで、「プロレタリア独裁政治とは言うが、実際はボルシェビキの一党独裁であって、かつまた一党の中の少数の指導者の独裁である」[51]と喝破する。レーニンは、プロレタリア国家をこれまでの国家から区別して、誕生と同時に死滅に向かって歩み始める存在であると位置付けていた。だが、この論文の著者は、権力を一度獲得した人間は権力に執着するものであって、これを進んで手放そうとする人はいないだろうと指摘する。それでは、かかる事態に至らしめない方策は何かと言うと、それは政権の奪取を目指すのではなく、目前の障害を除去するだけの革命、即ち「単純革命」を採用することであった[52]。

次にこの論文の著者は、プロレタリア独裁は実際には少数者による独裁であるため、英雄主義に陥りがちであることを指摘する。こうした危険性を回避するには、ボルシェビズムのように前衛と大衆とを分けるのではなく、民衆の解放運動は民衆自身が担うべきことを教え、少数の自覚者は運動の後方に身を置くべきであると言うのである[53]。最後に、著者はプロレタリア独裁の集権主義を問題にする。即ち、原理的に見た場合、集権を採用する社会主義は国家社会主義と集産主義であるが、マルクス主義は国家社会主義と同一とは言えないにしても、これにかなり似た性質を持

つものである。そして、国家社会主義は国家資本主義と同質であるため、ここに労働者は国家に従属する賃金奴隷となってしまうと言うのである。(54)

以上のように、「評平民的独裁政治」は四つの点からプロレタリア独裁の危険性を指摘した。これらの批判点は、いずれもアナキズムの原則に則ったものであった。取り分け、マルクス主義・国家社会主義・集産主義を一括りにして近似のものと捉える観点は、劉師復の論法の延長線上にあったと言えるであろう。しかし、プロレタリア独裁を原理的に批判しながらも、第三期『民声』の記事には、ロシア革命後の状況を特殊な事例と見なす傾向も現われている。例えば、第三一号の「通訊」の欄では、あるロシア人の投書に答えて次のように述べていた。即ち、ボルシェビキがプロレタリア独裁を採用した理由は、ロシア人民の大多数が目覚めないうちに、少数の人が幸運にも政権の奪取に成功したためであって、ここからロシア革命を誤りであったと批判してはならないと言うのである。(55)

だが、このようにロシアにおけるプロレタリア独裁採用の原因を社会的未成熟さに求めるならば、『民声』の執筆者たちは中国での将来の革命がアナキズムの原則に、果たしてどれほど忠実であり得るかという問題についても自問しなければならなかったはずである。以前、劉師復が中国の労働者の水準の低さを痛感した時からまだ六年しか過ぎていない時点で、中国の条件がロシアのそれを陵駕するに至っていたかは疑問である。今、この問題についての彼らの認識を確認することはできないが、もしそうした発想がなかったとしたら、それは五四運動の高揚感に伴う楽観主義の反映であったのかもしれない。

次の階級闘争の問題についてであるが、『民声』はこれをプロレタリア独裁と並んで「人を惑わし危険を生じさせやすいもの」(56)と捉える。何故なら、マルクスはブルジョアジーとプロレタリアートの闘争が千古不変の法則だというが、二つの階級の区分は極めて曖昧であること、そして階級闘争の観点から過去の歴史を解釈することは全くのこじつけに過ぎないからである。過去においては何度となく下層民の反乱が発生してきたが、これは人類固有の短所であ

る野蛮性を利用することによって生じたものである。現在、社会改良が必要であるとする所以は、人間の野蛮性が多すぎることによるのであるが、こうした問題は人間の長所即ち文明性を増加させることによって克服可能と考えられた。[57] 我々はここに、人性論に基礎を置いた階級調和の発想を窺うことができるのだが、その理論的根拠については後に見ることになるであろう。

さて、最後の絶対自由の問題については、『民声』第三〇号増刊に掲載された区声白の陳独秀宛ての公開書簡から見て行くことにしよう。[58]

陳独秀と区声白の意見の応酬は、中国におけるアナ・ボル論争を代表するものと目される。まず、双方の主張を概観しておこう。陳独秀によれば、アナキズムは個人の自由を強調するため、一人の反対が全体の意思決定を困難にする事態を招来しかねないとされる。これに対して区声白は、無政府社会は自由組織であるため人々は自由に加入・退出することができるのだから、反対者は賛成者の行動を妨げずに退出すればよいのだと説く。また、絶対自由と連合は矛盾するのではないかという点について、区は人間は災害時に助け合うのが常であるし、五四運動も自由な個人が連合した典型的な事例であるとした。更には、秩序を侵す人間は必ず存在するのであるから法律は廃止すべきではないとする陳の意見に対しては、法律はなくても公意によって社会は成り立つのだと述べていた。[59]

区声白の意見に対して、陳独秀は次のような反論を加えた。少数者の妨害のために、決定事項の執行ができない事態が生じたらどうすればよいのか。自由加入と自由退出の組織では生産に支障が生じるし、そもそも社会から退出することなどは不可能ではないか。そして、絶対自由の立場に立てば連合などは不可能である。区が連合の事例として挙げる災害は突発的出来事であるし、五四運動も一時的大衆運動に過ぎない。また、固定した法律がなくて時と場合に応じて適宜に判断されるのなら、それは恐怖政治に繋がる危険性があるのではないか。[60]

この後、双方から二度ずつ書簡のやり取りが続くことになるが、こと自由の問題に限って言うなら、区声白の立場

は上の陳独秀の批判に対する反論の中に極めて特徴的に現われていた。彼はそこで次のように述べている。

> 我々は当然、社会的自由に賛成するのであって、公共の利益を妨害する個人的自由には反対する。こうした個人主義的頑固派は、善良な教育を施し、無政府共産主義が実現された時には必ず減少する。［中略］公共の利益を顧みない個人的自由は、自由ではなく、逆に自由の大敵である。(61)

区声白は、自らの主張する自由とは現在の制度を打倒した後の状態における自由であるとして、それは「個人的道徳や新村運動」のような消極的手段では実現できないものであると言う。しかし、そこにある自由は相対的なものであって、個人の自由を以って他人の自由を侵犯してよいものではない。人と人とが交わって、お互いの自由を侵さないのが真の自由だというのである。(62) だが、如何なる社会においても、個人主義的自由を以って他人の自由を侵犯する人は存在するであろう。区はそうした事態には極めて楽観的である。即ち、そのような人に対しては説得を行ない、それでも聞き入れられなければ社会の外へ追放すればよいと言うのである。(63)

区声白の主張の中の自由の問題については、既に先行研究によって、それが中国の伝統に基づくところの、「人間が人間関係にあって動きまわることのできる自由」であって、「人間の内面的自由とか、本質的自由とかは、問題になっていない」ことが指摘されている。(64) そうした伝統に加え、「個」の拡充よりも「群」（＝共同体）の生存を優先することを求める近代中国の社会的要請は、アナキズム解釈においては自由よりも平等を優先させるところとなっていた。(65) かかる傾向は劉師復にも見られたところであるが、(66) 今ここにおいて区声白にもそれが受け継がれていたことが確認されるのである。

以上のように、『民声』におけるマルクス主義者批判は、アナキズム本来の思想的原理と中国的特殊性を併存させる形で展開された。そうした傾向は、自由連合論の互助社会観にも現われている。そこで最後に、この問題を人性論

との関連から扱った「無政府共産主義之心理上的解釈」と題する論説を見て行くことにしよう。

この論文は、まず人類の獣性は完全に滅却可能かという問題から説き起こす。著者によれば、人類も自然界の一部である以上、人類と他の動物とを区別する絶対的な基準は存在しない。ただ、人類以外の存在は自然法則の支配を絶対的に受けるのに対し、人類は自然の力を利用して自然の状況を変えて行く力を持っている。この点を除いて人類は野獣と変わることはないのだが、食欲や性欲のように生存に不可欠なものに加えて、人類には悪しき獣性——例えば他者を害ったりすることなど——があるとしても、それは後天的なものであって環境の変化と共に消滅するものである。しかも、進化の法則は人の性を善に向かわせて行くものであり、将来において今日の獣性は消滅あるいはそれに近い状態になると指摘される。(67)

次に取り上げるのは、人類の個性は可変か否かという問題である。このテーマは、アナキズム批判の矛先が絶対自由の問題に向けられていたことに関連していた。著者は、無政府共産主義が求めるものは絶対自由ではなく相対自由であるとして次のように述べる。

> 無政府共産主義の唯一の法則は「互助」である。互助の内面は何かと言えば、それは「情感」である。同情、愛情あるいは他の情感がなかったとすれば、互助の働きはどこから生じることがあろうか。情感を以って互助を行なったならば、自由もまたどうして「絶対」であることができようか。また、どうしてその絶対を求めることがあろうか。(68)

著者は人の互助の本性を個性の中に求め、人類の個性の淵源は更に物理世界の原子の状態に求められるとする。というのは、原子を構成し物質の性質の殆どの部分を決める役割を持つ電子は、他の電子と連動することによってのみ動く性向を持つからである。即ち、それ自身は連合体と衝突せずに動くばかりでなく、自らが動かなければ連合もできず、また連合しなければ自らが動くこともできない。こうした物理の世界に規定される人間の個性は一定であると考

えられる。従って人類社会の法則もかかる傾向を反映するため互助であり、そこにある自由も相対的なものということになるのである。(69)

第三のテーマは、人類を連合せしめる最大の原動力は何かということである。著者は、人間の連合の働きは法律や強制あるいは契約といったものとは無縁であって、人間が誕生（感覚賦与）と同時に具有する情感そのものであるという。連合の原動力は感覚であり、情感が人間の連合の方法となるのである。そして、この情感が経済上に現われた時には互助となり、道徳的には同情となって現われ、芸術上では美的情操、学問上では知的情操、社交上では愛の情操となって現われるのである。総じて、人類社会は情の糸が繋ぎ合わさったものと言うことができるのであって、情や欲を排除せよとする教えは人の性に著しく背いたものと言わなければならない。(70) 著者は第二のテーマにおいては、科学的な根拠を持ち出したのであるが、ここでは一転して抽象的概念としての情の働きを強調するに至ったのである。

著者はこの論文の最後で、情と理の関係について論じている。これは、アナキズムが社会生活において理性だけを強調し、人類を無味乾燥な状態に置こうとするものだとする批判に答えたものである。人間社会の組織力としての情の働きについては既に述べたところであるが、著者はこれに加えて以下の三点から理の重要性を指摘する。即ち、人類に最適の生活は情と理の調和がとれた状態であること、理性は感情の記憶の積み重ねと共に持続的に前進するものであること、そして人類の進化は理性の発達の結果であることである。人類が一歩進化すれば、理性の力は一段大きくなり、情感は一段小さくなるものである。そのため、将来においてあらゆる権力装置を廃絶しても、情は決して放縦に流れることはなく、社会にも混乱は発生しないというのである。(71)

以上の四点から、著者は次のような結論を導き出す。即ち、第一に「自由な連合と連合の自由」は永続的に存在すること、第二に法律・軍隊・政府といった権力装置がなくても社会に危険な状態は発生しないこと、最後に宗教や聖人が存在しなくても人類の道徳は日々進歩して最高度に達することである。そして、ここから著者は、無政府社会の

実現は時間の早晩の問題に過ぎず、その実現は必然であると述べるのである。(72)

この論文に限らず、アナキズム――取り分けクロポトキンの理論に基礎を置く無政府共産主義――は一般的に人類の進化についての確信に基づいて、将来に調和のとれた理想社会の到来を構想する。この論文の著者も、やはり進化の必然性を下敷きにしていることは明らかである。しかしそれと同時に、この論文に出て来る情や理といったものが、伝統的概念であることは誰しも気付くところであろう。そして、ここでの情の強調が、清代哲学の宋学批判の延長線上にあることは容易に理解される。清代における気の強調は人間をリゴリズムの呪縛から解放するものであったが、この論文の著者は情を以って人間の互助の動機づけの根拠としたのである。

かくして、マルクス主義という権力主義的社会観に対峙する中で、第三期『民声』の論者は互助を論じるに当たって、科学と共に伝統的観念の世界の中に自説の正当性の根拠を求めるという姿勢を示した。こうした傾向は、劉師復の時代には全く見られなかったことである。ここで、彼らが伝統を積極的に活用し始めたと断定することは、些か性急に過ぎるかもしれない。しかし、このような傾向が現われたということは、彼ら『民声』の論者たちが師復の衣鉢を継ぎながらも、具体的な思想展開においては多様性を見せはじめていたことを示していると言えよう。

第四章　結　語

私は本稿において、劉師復死後の『民声』の刊行状況と、その内容について考察してきた。ここで明らかにされたのは以下の諸点である。

第二期『民声』の特徴は、劉師復の思想的遺産の継承にあった。第一期と比べて、この時期に出版された『民声』では論説記事は激減するが、それらには道徳主義の一点を除いて、無政府共産主義とサンディカリズムの結合、そし

て反政治主義の姿勢が貫かれていた。この時期の師復の後継者たちの活動は師復に及ぶことは望むべくもなかったが、彼らは少なくとも師復の思想に忠実であることによって、中国アナキズム運動の命脈を保とうとしていたのである。

第二期『民声』停刊以後、劉師復の後継者たちは各自の持ち場で活動を行なった後、陳炯明の支配地域で再び結集し、活動を再開することとなった。この間の行動で特徴的であったことは、ロシア人が間に入った形でマルクス主義者との緩やかな協力体制が形成されたことである。そして、束の間の協力関係が崩壊した後、第三期『民声』が登場したのであるが、これは一転してアナ・ボル対立の構図を直截的に反映するものであった。そのため、第三期の記事の多くの部分がマルクス主義批判に当てられたのである。『民声』のマルクス主義批判には、生前の師復の如く西洋アナキズムの原則論の提示が見られた反面、中国的伝統の反映も見られた点で特徴的であった。取り分け、物理学と情の結合による互助社会実現の正当化は、東西の思想の習合の一例を示すものであったのである。

一九二一年八月一五日、『民声』は第三四号を以って停刊する。かつて「民声小史」の著者は、「人類が頼りとし続けるものは、絶えざる希望の中にのみ存在する」として、将来の『民声』に対しても絶えず希望を持ち続けることを訴えていた(73)。今、『民声』の停刊によって、その希望の対象であった「宇宙の小さい塵」は完全に消え失せたかのように見える。しかし、実際はそうではなかった。『民声』を通じて全国各地に撒かれたアナキズムの種子は、五四・新文化運動を経て、四川を初めとする各地で芽吹き、そして開花し始めていたのである。

(1) 劉師復（一八八四～一九一五）は広東省香山県の人。原名は紹彬、字は子麟。清末に排満革命に志して思復と改名し、アナキストとなってからは家族制否定の意を込めて姓を廃して「師復」と称した。

(2) 狭間直樹「『民声』解題」、『民声』（原本復刻版）、朋友書店、一九九二年、二頁。なお、『民声』のテキストとしては、これまで香港の龍門書店版合訂本（一九二一年の広州平民書社版に基づく）が広く用いられていたが、そこではエスペラント版の全面削除や原本にない文章が挿入されるなどの問題点があった。原本復刻版の刊行によって、こうした問題は解消されたと

言える。

(3) 同右、三―六頁。

(4) 劉師復に関する研究成果については、拙稿「劉師復とアナキズム――辛亥から五四への架橋――」(『法学研究』第六十六巻第五号、一九九三年五月)の注四を参照されたい。なお、最新の研究としては、石川洋「師復と無政府主義――その論理と価値観を中心に――」(『史学雑誌』第一〇二編第八号、一九九三年八月)および、同「師復の革命論――平民革命と無政府主義――」(『中国哲学研究』第八号、一九九四年七月)がある。

(5) 「民声小史」、『民声』第三〇号(一九二一年三月一五日)、四頁。

(6) 梁冰絃(?～一九六〇?)は広東省南海県の人で、清末に同盟会に加入し、民国成立後、師復の影響を受けてアナキストとなった。南洋地域で雑誌や小冊子の発行に携わり、五四時期に帰国してサンディカリズムの宣伝に努めた。許論博(生没年不詳)は広東省潮陽県の人で、早くからエスペラントの普及に努め、一九一二年に設立された広州世界語会の会長に就任している。なお、彼は平民公学付設世界語学校で師復にエスペラントを教えた人物でもある。黄尊生(一八九四～?)は広州市外江村の人で、師復と共に許論博にエスペラントを学んだ。後に、フランスのリヨン大学に学び、帰国後は中山大学教授などを務めた。上記の人物のほか、第一期『民声』の外国文記事からの翻訳者には、安真、如晦、量能、耀栄などの名前が見える。

(7) 「記師復君追悼会事」、『民声』第二三号(一九一五年五月五日)、一一頁。なお、六月二七日に香港でも追悼会が開催されている(「記師復香港追悼会」、『民声』第二五号、一九一五年六月一日、八頁)。

(8) 「本報哀告」、『民声』第二三号、四頁。

(9) 「無政府共産主義同志社宣言書」、『民声』第一七号(一九一四年七月四日)、三頁。

(10) 克労(鄭佩剛)「吾人二十年来之伝播品」、張允侯・殷叙彝・洪清祥・王雲開編『五四時期的社団』四、生活・読書・新知三聯書店、北京、一九七九年、三二七頁。

(11) 狭間直樹、前掲、六頁。

(12) 劉石心「弟の語る師復」、嵯峨隆・坂井洋史・玉川信明編訳『中国アナキズム運動の回想』、総和社、一九九二年、八八頁(以下『回想』と略す)。なお、バナールは林君復が主宰したのは二四号から二六号までであったとしている(Martin Bernal "Liu Ssu-fu and Anarchism in China; A Note for the Reprinting Version of Min-sheng",『民声』合訂本、香港龍門書店、一九六七年、二頁)。

(13) 欧西「南洋無政府主義運動の概況」、『回想』、一六四頁。
(14) 「劉石心の回想」、『回想』、二九七頁。
(15) 「鄭佩剛「《実社自由録》から《進化》まで」、『回想』、一〇四頁。なお、楽無（太虚）はかつて社会党のメンバーであったが、一九一三年八月以降運動から離れ始めたと言われており（葛懋春・蒋俊・李興芝編『無政府主義資料選』上、北京大学出版社、一九八四年、二三一頁）、彼がどの程度まで第二期『民声』に関わっていたかは不明である。
(16) 冰絃「同志勗諸」、『民声』第二五号（一九一五年六月一日）、四頁。
(17) 「英煤礦工人之罷工」、『民声』第二七号（一九一六年二月三〇日）、八頁。
(18) 「本報啓事」、『民声』第二六号（一九一五年六月一五日）、一一頁。
(19) P. Y.「進行間之無政府党」、『民声』第二八号（一九一六年九月一〇日）、一―二頁。
(20) 国成「時事罪言――革命之真義　人民之自覚心　根本解決」、『民声』第二八号、三頁。
(21) 同右、六―七頁。
(22) 劉師復「政治之戦闘」、『晦鳴録』第一号（一九一三年八月二〇日）、一頁。
(23) G.Steffen「克魯泡特金対于欧洲戦争之意見」、『民声』第二三号（一九一四年八月九日）、七頁。
(24) Kreu「戦争与無政府党」、『民声』第二三号、九頁。
(25) 王帝皇「政魔之末日」、『民声』第二九号（一九一六年一一月二八日）、九頁。
(26) 第二七号の「本報要告」には次のように述べられている。「図らずも、数月来、本報の撰述の任を担っていた同人は、外国に留学したり、また遠方に就職するなどしたため、以前にもまして原稿の徴集や印刷費の工面に困難を来すようになり、定期的に出版することが益々困難になった。同人は様々の手立てを考えたが良い方法がなく、今後は本報を不定期雑誌とし、原稿と印刷費が揃った時点で発行することとする」（一二頁）。
(27) 「《実社自由録》から《進化》まで」、一〇五頁。
(28) 『民声社紀事録』全三期のうち、現在残されているのは創刊号のみであるが、これを見ると、中国の第一次大戦への参戦反対を論じた「加入戦団」と題する記事を除いて、殆どが国内外の革命運動・労働運動のニュースで占められている。
(29) 「《実社自由録》から《進化》まで」、一〇五―一〇六頁。
(30) 「吾人二十年来之伝播品」、三二八頁。なお、該誌「発刊詞」については、中共中央馬克思　恩格斯　列寧　斯大林著作編

訳局研究室編著『五四時期期刊介紹』第二集、人民出版社、北京、一九五九年、五四六－五四七頁を参照されたい。

(31)「劉石心の回想」、二九七頁。

(32)「進化社」、『五四時期的社団』四、一八一頁。

(33)「劉石心の回想」、二九七－二九八頁。なお、他の箇所にこれを一九二〇年のこととする記述もあるが、そうだとすれば全くつじつまが合わなくなるため、誤りかと思われる。

(34) 同右、二九八頁。なお、閩南護法区の様子については、海隅孤客（梁冰絃）「解放別録」（『回想』所収）を参照されたい。

(35) 鄭佩剛「上海社会主義者同盟結成の頃」、『回想』、一九九－二〇〇頁。

(36) 同右、二〇一－二〇二頁。ここでいうロシア人とは、ヴォイチンスキー以外には考えられないが、本稿では資料に従ってストロミスキーと記しておく。

(37)「譚祖蔭の回想」、二八三頁。

(38)「劉石心の回想」、二九三頁。

(39) 鄭雅如「論広東早期馬克思主義者与無政府主義者的合作与闘争」、『中国人民警官大学報』（哲学社会科学版）、一九八七年第四期、一五－一六頁。

(40)「共産党的粤人治粤主張」、『労動者』、広東人民出版社、一九八四年、二一－二三頁。

(41) 任建樹によれば、広東で共産党が組織されたがそれは『無政府主義共産党』というべきものであったとされる（『陳独秀伝』上、上海人民出版社、一九八九年、二一二頁）。

(42)「劉石心の回想」、二九二頁。なお劉は「私は、二人のロシア人が私たちと広東共産党を結成したいなどということを聞いたことがない」（同、二九三頁）と述べ、合作建党の事実を否定している。

(43)「黎昌仁の回想」、『回想』二七七－二七八頁。

(44)「劉石心の回想」、二九二頁。

(45)「民声小史」、一頁。

(46)「広告」、『民声』第三〇号、一六頁。

(47) 宮本正男『大杉栄とエスペラント運動』、黒色戦線社、一九八八年、六〇頁。

(48) 蔣俊「晦鳴録和民声」、中国社会科学院近代史研究所文化史研究室　丁守和主編『辛亥革命時期期刊介紹』第四集、人民

出版社、北京、一九八六年、四六四頁。なお、第三期『民声』は全編無署名記事となっており、第三〇号増刊の公開書簡を除いて執筆者を特定することはできない。

(49)「無政府共産派与集産派之岐点」、『民声』第三〇号。一一頁。

(50) 同右、一二頁。

(51)「評平民的独裁政治」、『民声』第三二号（一九二一年五月一五日）、一頁。

(52) 同右、三頁。

(53) 同右、三―四頁。

(54) 同右、四頁。

(55)「俄国同志V. Stopani来函」、『民声』三一号（一九二一年四月一五日）、一四頁。勿論、この文章はプロレタリア独裁を無条件に許容するものではなく、著者はこれに続けて、「少数の人で政権を握って、全ての産業を政権の座にある人の手に操らせたら、新たな資本家を生み出す危険性がある」ことを指摘している。

(56)「『階級闘争』和『平民専政』果適于社会革命嗎」、『民声』第三三号（一九二一年七月一五日）、三頁。

(57) 同右、四頁。

(58)『民声』増刊号には、「区声白致陳独秀書」「区声白答陳独秀書」「区声白再答陳独秀書」の三編が掲載されているが、このうち前二者は『広東群報』からの転載であり、最後の一編はこの時点では未公刊であった。なお、本文でも触れたように、中国人アナキストによるマルクス主義批判は、既に一九一九年に開始していた。即ち、この年の二月に黄凌霜が「評『新潮』雑誌所謂今日世界之新潮」を発表し、マルクス主義を「集体社会主義」として批判していた。そして同年五月、黄は「馬克思学説批評」を発表し、プロレタリア独裁を自由連合論の立場から批判していたのである。これに対して、マルクス主義者の側からは、一九二〇年九月に至って陳独秀が『新青年』誌上に「談政治」を発表し、国家の階級的本質を指摘していた。更に、陳は広州に移った後の二一年一月に、公立法政学校で「社会主義批評」と題する講演を行なった。区の書簡は、これに対する反論として書かれたものである。

区声白（一八九三～?）は広東省仏山県の人で、広州無政府共産主義同志社に加わり、北京大学に進んでからは実社の成員となって『実社自由録』の出版に携わった。一九二〇年以降広州で活動を続け、二一年には広東共産主義小組に加わったが見解の違いから退出したという。二二年にフランスに留学し、『工余』の出版に携わる一方でリヨン大学に学び、帰国後は中山

大学教授、広州市教育局課長などの職を歴任した。抗日戦争時期に汪精衛政権に参加したが、その後のことについては不明である。

(59)「区声白致陳独秀書」、『民声』第三〇号増刊（一九二一年四月五日）、四－六頁。

(60)「陳独秀答区声白的信」、『広東群報』一九二一年一月二七日、後に『新青年』第九巻第四号（一九二一年八月一日）に転載。

(61)「区声白答陳独秀書」、『民声』第三〇号増刊、七頁。

(62) 同右、一〇頁。

(63) 同右、一一頁。なおこの後、陳独秀からは、社会からの退出とは如何なる意味か、それは不可能なことではないか、区が一方では個人的アナキズムに反対しながら、他方では個々人の同意と自由退出の社会を認めているのは矛盾するのではないか、などといった反論がなされている（「陳独秀再答区声白書」、『新青年』第九巻第四号）。

(64) 宇野重昭「自由と統合をめぐる区声白・陳独秀論争――コミュニズム＝アナーキズム論争の一断片」、『成蹊法学』第一一号、一九七七年六月、八五－八六頁。

(65) そのような事例としては、劉師培の「無政府主義之平等観」（『天義』第四－七号、一九〇七年七月二五日、八月一〇日、九月一五日）が上げられる。

(66) 石川洋「師復と無政府主義――その論理と価値観を中心に――」、二九頁。

(67)「無政府共産主義之心理上的解釈」、『民声』第三〇号、四－七頁。

(68)「無政府共産主義之心理上的解釈（続）」、『民声』第三一号、七頁。

(69) 同右、八－九頁。

(70)「無政府共産主義之心理上的解釈（続）」、『民声』第三二号、六－八頁。

(71)「無政府共産主義之心理上的解釈（続）」、『民声』第三三号、六－八頁。

(72) 同右、八頁。

(73)「民声小史」、四頁。